氏　　名	胡　春艶（コ　シュンエン）
学　　位	博士（中国言語文化学）
学位記番号	甲第176号
学位授与年月日	2023年3月23日
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	『紅楼夢』における形容詞重畳式についての研究
論文審査委員	
	（主査）大東文化大学教授　大島吉郎
	（副査）大東文化大学教授　丁　鋒
	（副査）大東文化大学特任教授　佐竹保子
	（副査）山東大学教授　時　衛国

博士論文　審査報告書

1　本人履歴、研究の経緯および研究業績

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされております。ご了承ください。

2　研究方法、論文の構成と内容

本論文（本文104頁、附録8点全68頁、全172頁）は次の章立てから構成されている。

第一章　序論

1.1　問題意識

1.2　研究方法

1.3　本研究の目的と位置づけ

1.4　言語資料について

1.5　本研究の構成

第二章　先行研究と問題点

2.1　中国語の形容詞重畳式についての先行研究

2.2　日本語畳語形容詞および日中対照に関する先行研究

2.3　『紅楼夢』における形容詞重畳式および日中対訳に関する先行研究
2.4　問題点
第三章　形容詞重畳式について
3.1　関連概念の整理
3.2　形容詞重畳式の特徴
3.3　形容詞重畳式の意味関係
3.4　まとめ
第四章　『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式
4.1　『紅楼夢』前八十回における AA 式形容詞重畳式
4.2　『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式
4.3　『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式
4.4　『紅楼夢』前八十回における ABAB 式形容詞重畳式
4.5　『紅楼夢』前八十回における 形容詞重畳式の意味分析
4.6　まとめ
第五章　『紅楼夢』後四十回における形容詞重畳式
5.1　はじめに
5.2　『紅楼夢』前八十回と後四十回の統計的研究
5.3　使用頻度からの比較
5.4　文体学から見た前八十回と後四十回の相違点
5.5　まとめ
第六章　『紅楼夢』各版本における ABB 式形容詞重畳式の比較研究
6.1　はじめに
6.2　『紅楼夢』の版本についての説明
6.3　各版本における ABB 式形容詞重畳式の比較研究
6.4　まとめ
第七章　認知言語学から見た『紅楼夢』の形容詞重畳式
7.1　文成分の制約条件―“的”との共起
7.2　空間化から見た基式と重畳式
7.3　視点―「当事者事態関与型」と「傍観者事象観察型」
7.4　共感覚メタファーから見た ABB 式形容詞重畳式の認知プロセス
7.5　終わりに
第八章　『紅楼夢』における形容詞重畳式とその日本語訳の対照研究
8.1　はじめに
8.2　『紅楼夢』の日本語訳について
8.3　日中擬声・擬態語とは
8.4　AA 式形容詞重畳式とその日本語訳の対応研究
8.5　対応の動機づけ

8.6　まとめ
第九章　終章
9.1　本研究のまとめ
9.2　今後の研究課題
引用書目
参考文献
附録1～8
図表一覧
論文初出掲載一覧

第一章、第二章では、研究の背景と動機、研究方法、目的及び位置づけ、言語資料の性質と位置づけ、先行研究と課題について整理、概観する。

第三章では、形容詞重畳式についての関連概念の整理を行う。具体的には、中国語における形容詞の定義と分類、形容詞重畳式の定義、形容詞重畳式に見られる「AA式重言」と「AA式重畳」の分類についてである。形容詞重畳式の特徴について、描写性、量範疇、主観性の三要素を取り上げ詳述する。形容詞重畳式の構造的特徴から重畳式構成要素を基式と設定し、重畳式の意味関係が「分離·独立のタイプ、融合のタイプ、包含のタイプ」に分けられることを主張する。

第四章では、『紅楼夢』前八十回におけるAA式、ABB式、AABB式、ABAB式の形容詞重畳式を使用頻度により統計処理を行う。各パターンの語構成および文成分について分析し、意味分析を行っている。AA式は、基式であるAの性格に基づき分類され、ABB式はAとBBの性格から分類される。このABB式は張美兰(2001)[1]に示される通時的記述に基づき、① A＋BB→ABB[接尾辞が重畳する附加式]、② AB＋B→ABB[結果的に後置成分が重畳を形成する拡張式]、③ BA＋B→ABB[前置成分が重畳し、倒置する拡張式]、④ AABB—A→ABB[双音重畳する前置成分の A を省略する方式]に分類する。AABB 式は基式の属性によって、[AB×2]のAABB形容詞重畳式と[AA+BB]のAABB形容詞畳加式に分けられる。形容詞重畳式の表現論的解釈に当たっては、「描写性」を発展させた「物語性」による解釈を提案するとともに、各パターンが使用される場面、文脈に基づき、物語性、具体性、個別性、量範疇の諸方面からの検討を行っている。

第五章では、後四十回における形容詞重畳式を統計学の手法により処理し分析を行う。前八十回の形容詞重畳式のデータと比較し、言語の連続性という面から、作者の同一性についての検討を進めている。修辞論的観点、文体論の面から前八十回と後四十回におけるAA式、ABB式、AABB式の形容詞重畳式を比較し、使用頻度、類義語の選択、使用目的・場面・文脈から、前八十回と後四十回の異同点を検討する。

第六章では、『紅楼夢』脂硯齋重評本系写本11種類、および活字本である程甲本、程乙本におけるABB式形容詞重畳式について版本間の異同を調査することで、版本の系統、成立の前後関係に新たな視点からの客観的データの提示を試みる。併せてコーパスを利用し、ABB形容詞重畳式“白汪汪、凉森森、散松松、甜丝丝、乌压压、咸津津、羞惭惭、牙痒痒、意绵绵、油汪汪、怔呵呵、直瞪瞪、直厥厥”　13語が『紅楼夢』に初出であることを示す。

---

[1] 張美蘭2001《近代漢語後綴形容詞詞典》、貴州人民出版社。

第七章では、認知言語学の観点から、『紅楼夢』における形容詞重畳式が連用・連体修飾語、述語、状態補語として機能する際の制約条件の一つとして、助詞“的”との共起関係について分析を行うとともに、通時的観点から『紅楼夢』における状況（“的”との共起関係が必ずしも必須ではないこと）を記述し、近世中国語から現代中国語への過渡期的局面にあることを指摘する。第2節では、ABB式生成の動機付けに対して、認知的空間化のモデルを提示し、基式（単音節性質形容詞）と重畳式（状態形容詞）の差異を「当事者事態関与型視点」と「傍観者事象観察型視点」により説明を試みる。ABB式形容詞重畳式の認知プロセス及びAとBBの制約性については共感覚メタファーを理論的根拠として考察を行っている。

第八章では、『紅楼夢』全120回に現れるAA式重言及びAA式形容詞重畳式541例に対応する日本語訳との対照についての考察を行う。『紅楼夢』の代表的日本語訳3種を整理し対訳を検討することで、日本語訳では174例が擬声語・擬態語に翻訳され対応関係にあることを指摘し、その理由を考察する。ある状況における話者の主観的情感を叙述する際に、日中両言語でそれぞれ異なる表現手段を用いてはいるものの、描写性、具体的な個別性、五感からの体験性、主観性において共通点が見られることを指摘するとともに、これらの意味素がAA式と日本語オノマトペの主要な動機付けであることを主張する。

第九章終章では、本研究のまとめおよび今後の研究課題を述べる。

3　研究の成果および評価

言語資料としての『紅楼夢』は、18世紀中頃の清朝中期、乾隆帝盛世の時代において創作された小説であり、中国を代表する古典小説として今日まで高く評価され、中国四大名著の一つとして多くの読者を獲得している。作者の筆になる原作は失われているものの、書写された数多くの写本が存在し、禁書令を解かれた後には全国の書肆が競って刊行するなど、時代と地域を越えて読まれた本資料は、共通語（官話あるいは普通話）形成にとって大きな言語的影響を及ぼしてきたと言える。当時の北方官話を基礎にして書かれた『紅楼夢』の言語的分析は、中国語の通時的研究に重要な意味を有するばかりでなく、中国各地から発見される写本における字句の書き換えという現象が文学史、文献学、方言学にとっても重要な知見を提供することになる。本論文はこのような特性を有する作品を言語資料として、形容詞重畳型についての考察を行ったものである。孤立語的性質を強く有する中国語は単音節語を基本とすることから、重畳型が多様に発達しており、形態変化に乏しい中国語における顕著な形態変化の例であると言うことが出来る。

形容詞重畳型AA式は『詩経』を始めとする韻文、散文に多用され、ABB式は唐代以降の文学作品に用いられる形式である。『紅楼夢』は前八十回をオリジナル、後四十回は別人による補筆とする説が一般的であるが、本研究は、従来の『紅楼夢』研究において空白部分であった形容詞重畳型を対象に版本間における書き換えを丹念に記述した点、全用例に対する計量的分析による前八十回と後四十回の言語的相違点を明らかにした点が高く評価される。認知言語学の観点による重畳式の解釈は上述の通り、これまでの通説を改める明晰な論点に立っており、程度表現との差異を明らかにした点に特徴がある。巻末に付されたデータは研究の客観性を担保するものであり、今後の研究に更なる展望を与えるものと評価される。

4　結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以上